

選挙から外交まで貫く誠意

真鍋 賢二

昭和三十八年十一月二十一日に行われた第三十回総選挙は、平日投票のため投票時間が二時間延長されて午後八時に終了した。天候も順調であつたし、投票率も低くはない。選挙の開票は何度やっても一種の期待と不安を伴い、選挙関係者の心を昂ぶらせる。しかし、選挙事務所が集まつた大平正芳先生の陣営には不安の影はほとんど言つてよいほどなかつた。三十三年選挙、三十五年選挙と過去二度にわたり、トップ当選を果たし、とりわけ前回の三十五年選挙では、六万四千票対四万二千票と二位の加藤常太郎候補に票数で二万二千票、得票率では五割も引き離して断然たる強みを示している。その上、この三年余の政治活動で、大平先生は池田内閣の官房長官を二期、続いて外務大臣の要職に就き、中央政界でもようやく大器の片鱗を見せ、日の出の勢いにあつた。大平先生は五十三歳で政治家として脂が乗り切つた働き盛りであり、選挙は六回目で組織も整い何の不安材料もない。このため、茨木山治選挙事務長をはじめ選挙の采配を振るつた後援会幹部は、「一位当選は当たり前だが、七万票の舞台に乗せ、二位になんば差をつけるかや……」と威勢のよい話題に花を咲かせ、期待に満ちていた。

やがて票が出はじめると加藤陣営が順調に伸びているのに、大平陣営の票は期待したほど出てこない。開票所においては加藤陣営に負けている。「まだこれからや、こんなことはない……」と言つていた幹部の声も次第に低くなる。大平先生の当選確実は出されたが、大きく得票を伸ばした加藤候補にトップの座

を奪われ、二位に転落することが確実になると、選挙事務所は初めの明るさは影をひそめ、重苦しい沈黙が支配しはじめた。

開票結果は、加藤候補が前回より二万五千票以上を伸ばして六万七千票を獲得したのに対し、大平先生の得票は前回の得票とほぼ同じで、わずか十一票ではあるが票を減らし、六万四千六十六票で二位となった。「何でだ……」、選挙関係者の期待が大きかっただけに受けた衝撃も大きかった。

この選挙結果に対し、直ちに敗因を追究する声があがった。加藤候補の物量選挙をあげる幹部もいた。しかし、それでは三位の福田繁芳候補が八千票、次点の佐々栄三郎候補が一万票以上伸ばしたことの説明にはならない。大平先生の中央政界での地位が上がったため自分の選挙だけに専念することができず、派閥の幹部として、苦戦が伝えられている再選を目指す佐々木義武先生や田沢吉郎先生、初の当選を目指す伊東正義先生や田中六助先生など多くの同志の応援のため全国を飛び回らねばならない。たしかに、これも幾らかの原因にはなったかも知れないが、今後、大平先生の中央での地位が上がるにつれ、そんなことは言っていられない。第一、自分の選挙に弱い候補者が政治家として大成したためしがない。大平先生の大成を信じる第一秘書の私は、目先のことに原因を求めようとする後援会の幹部とは別に、大平先生が今後心おきなく中央の政治に専念できる体制をつくるため、より本質的なところにメスを入れるべきではないか、と考えはじめた。「過去三回の先生は、当選には不安はないが、票の伸びが止まっている」ことに目をそむけるべきではない。

雄心会と芳友会を結成して選挙母体に

こんな思いを胸に、若手の指導的な立場にある三崎矩光さんや塩田邦博さん、久保定市さんといった同志と相談すると、思いは私と同じであった。「池田内閣の閣僚で二位になったのは大平外相だけだ……」

などと悪口を言われるようなことは許しておけない。時代が変われば選挙運動のやり方も変わってくる。いつまでも同じやり方で満足していたのでは、時代にとり残されていくのは当然である。この際、将来のために思い切った選挙体制の見直しをやる必要がある、ということまで私たちの意見は一致した。そして、私が代表して大平先生に意見を申し上げることとなった。

私が、「このような停滞ムードのとき、どうしたらよいのでしょうか……」と申し上げたのに対し、大平先生は「これまでの選挙では、僕のクラス・メイトや企業の同士など僕の同世代が、それより上の先輩が中心になって運動をしてくれた。十余年前、僕が初めて選挙に出馬することを決意した当時、これに賛成し、支援してくれた有志は、最初はもの珍しくて、あらゆる面から忠告してくれたし、協力もしてくれた。運動もわが身の如く真剣に動いてくれた。これが、三回、四回と回を重ねると選挙に対する心構えも経験というか、こつやればいいんだと考えが固定してくる。初心のときには、『声かけて』という熱意が八方に広がり、それが核分裂して同志の力強い爆発力になっていく。しかし、人はいつまでも初心を忘れずということとは、言うは易しいが行うは難しいものだ」と言われた。さらに、「自分たちは一生懸命やっているつもりなのだろうが、いつの間にか慣れが生じ、口は達者になるが銜えギゼルで動きの方が鈍くなる。老化現象は如何ともし難い。大切なのは初心だ。すまんけれども、選挙母体をお前の年齢層に移してくれ……」と言われた。

こうして、大平選挙体制の若返り作戦がはじまり、若い有志が集まって「どうしたらよいのか」という研究会が始動した。当時、大平先生の盟友である田中角栄先生は、選挙ごとに大量得票するので有名であったので、いま香川県の県会議員をやっている大西末広さんが新潟まで行って、越山会の研究をやった。越山会の活動は、日常活動の規模が大平陣営の運動とは比較にならないほど大規模で活発である。しかし、これは、どう考えても大平先生の選挙には当てはまらない。問題なのは、大平先生にふさわしく、かつ持

続性のある選挙体制の確立である。

その結果得た結論は、「目先の一票、一票の寄せ集めや安易な目先の利益誘導に走ることなく、東京、京阪神、高松市などを中心に三十歳、四十歳台の気鋭で質の高い有志を募ること、地元では坂出、丸亀、観音寺などの拠点に同じく若手の指導的な同志を結集し、日頃の政治研究会を通じて結束を高め、これを大平先生の人間の魅力と政治理念によって同志的団結にまで高めること、同志は数の多きを目的とせず、長きにわたって苦楽を共にする人材を厳選すること……」などの基本方針が決まった。

こうして、東京は三崎さんが中心となる。京阪神は塩田さん、高松では久保さんが中心となって有志を募り、『雄心会』を結成した。初め、雄心会は東京では五十名ぐらいからはじまり、最終的には二百名、大阪では百五十名、高松は百名ぐらいになった。また地元では坂出、丸亀、観音寺などの拠点を中心に、一日百軒の予定で家庭訪問し、若い人を連絡員という形で加入していただくように勧誘した結果、二月余りで千五百人の連絡員ができたので、『芳友会』を結成した。こうして、大都市の同志から地元働きかけるとともに地元でもこれを受け止め、着実に拡大する組織が確立され、この組織は選挙のたびに成果をあげていった。以後、大平先生の得票は毎回伸び、先生は有効投票に対する得票の比率で日本一の座を占めるまでとなり、「わしは選挙に強い」という絶対の自信を持つまでに至った。

私は、大平先生の選挙に携わって二十年余、六回の総選挙を戦い、その後、自らも参議院選挙に出馬して三回、その他数多くの選挙戦を戦い、選挙の辛酸は、いやというほど嘗めてきた。外から考えて五万人、十万人という人に大平先生の名前を書いてもらい、あるいは、自分の名前を書いてもらうということは、気の遠くなるほど難しいことである。選挙通の中には、一人で百票持っているとか、二百票持っている人がいる。しかし、一人の人が本当に信頼できる親友や親族というのは五人か十人である。その人から頼まれて、「よし、お前の言うことなら……」という信用をいただいで、獲得できる票というのは、その五票か

十票が限度である。その積み重ねが五万票、十万票になる。これを大切にするのが選挙の鉄則だと思う。雄心会や芳友会は、その同志の核であった。

こうして見るととき、選挙において大切なものは、第一に、候補者の人物、第二に組織と行動力であるが、これを貫く信頼の誠があつて初めて組織は生きたものとなる。この信頼は、日常活動の裏打ちによって初めて強固なものとなるのだと言えよう。大平先生は、「できることと、できないことを峻別し、いやしくもできそうもないことを安請合ひしてはならない」と私を厳しく戒められた。そして、一度約束したことは、どんなに苦しくとも、その実現に全力をあげることを教えられた。政治家と選挙民の信頼関係は、この約束と実行の繰り返しによってのみ成り立つのである。

信頼関係こそが外交の基本

選挙だけではない。国と国との交際である外交においても真に大切なものは、日頃の行動によって形成された政治家と政治家の信頼関係、それによつてもたらされる国民と国民の信頼関係である。大平先生は、その事実を大蔵省の役人時代から、政治家となつて四年の外相時代、二年の大蔵大臣、そして最後の総理大臣の在任の期間を通じて貫き通された。

戦前の日本は財政が逼迫していたので、イギリスやフランスなど多くの国々から外債を募つて多くの事業を行つてきた。この外債は、第二次大戦の敗戦によつて無一物に近くなつた日本にとつて、ほとんど支払い困難なものであった。しかし、福田赳夫先生や大平先生など当時の大蔵省の官僚は、苦しい中で歯を食いしばつて、少しずつでも返済していくという方針を決め、その返済に全力をあげて努力した。その誠実な努力は、「日本という国は嘘をつかない」という信用となり、日本の国際復帰にどれだけ役に立つか知れない。この信用が外交の基本なのだと思う。

至難と言われた日中国交正常化が実現された裏にも、この愚直なまでの誠意と誠実さが、周恩来首相など中国首脳の胸を打ち、難局や行き詰まりを打開したのであり、私は自分の眼で、歴史の最も深いところにある政治家と政治家の信頼と誠意の大切さを見た思いがした。

こうした中で今も鮮やかに思い起こされるのは、一九八〇年四月三十日から五月十日までの十二日間、五万余キロに及ぶ大平総理の最後の外遊であった。四月末から始まるゴールデンウィークを利用して、メキシコ、カナダなど対日関係が急速に深まってきた両国を訪問し、首脳外交によって一層関係を緊密化するという案であり、外交日程が詰められていた。ところが、日程が迫るにつれ「メキシコとカナダを訪問しながら、アメリカを素通りするのはいかなものか」という意見が高まり、急遽日程を変更して、まずアメリカを訪問し、メキシコ、カナダを巡ることとなった。

当時のアメリカをめぐる国際情勢は、前年の十一月四日のイランのアメリカ大使館員人質事件、年末のソ連軍のアフガニスタン侵攻が起こり、これに対抗してカーター大統領の打ち出したイランの石油禁輸政策やモスクワ五輪ボイコットの呼びかけは必ずしも西側同盟国の支持を得ておらず、アメリカ外交に焦りと苛立ちの色が深まっていた。アメリカが国際的に孤立感を深めた初めての事態であった。こんなとき、イランからの石油の輸入禁止とモスクワ五輪ボイコットをとの共同歩調の呼びかけは、原油の大部分を中東に依存する日本にとって苦しい選択であった。しかし、大平先生の判断は早くから固まっていた。「石油とオリンピックを比べれば石油の方が大事」、「石油とアメリカを比べればアメリカの方が大事」というのが先生の信念であった。そのため、「苦しいときにこそ米国民を勇気づけ、励まさねばならない」という判断から、米国を第一の訪問国とし、四日の日程を取るという組み替えが行われた。政府は訪米直前の四月二十五日、伊東正義官房長官を通じてモスクワ五輪への選手派遣は好ましくない旨、日本五輪委員会に通告した。しかも、その直前、アメリカの大使館員人質救出作戦失敗の報が入り、アメリカの政府、国

民の孤立感と失望感は最高潮に達していた。

アメリカでの総理一行の歓迎は熱烈であった。上院、下院の訪問では議員が総立ちになって拍手で迎えてくれた。朝には朝食会、昼には昼食会が計画され、そのどこでも議員や財界人が立って拍手で迎えてくれる。参議院議員として、総理の公式訪問に初めて随行した私は、「アメリカでは外国の国賓は皆立って拍手で迎えるのが慣習なのか」と思い、マンスフィールド駐日大使に尋ねると、マンスフィールドさんは「大平総理に対する尊敬の念と苦況にあるときの同盟国の友情がマッチして拍手に変わったのだ。それも立ち上がり、拍手するというのは、我が国のために協力してくれた感謝の気持ちを、こういう形で表すのだ」と説明してくれた。

超大国のアメリカがかつての敗戦国の日本の総理に、このように熱狂的な歓迎をしてくれているということに、私の胸の底から熱い感動が湧き上がってきた。「アメリカが喜んで心から拍手してくれている」という友情と同志的共感で私の目頭が熱くなった。この思いを大平総理に話すと、「そうだ、誠心は人も国でも同じだし、どこの国でも必ず通じるものだ。外交だって手練手管ではない。最後にものをいうのは誠意だよ。アメリカは日本の誠意がわかったので、このよ様な思いがけない歓迎になったのだらう」と、あの何とも言えない笑顔で応えてくれた。カーター大統領は執務室でお目にかかったとき、「日本が石油が足りなくなるのなら、アメリカは協力しよう」と申し出て下さった。共艱共苦の同志への友情から出た言葉であったのだらうが、ご厚意だけ有難く頂戴した。

最後の外遊は何処でもこの誠心で貫かれた。カナダでも大平総理は、「何でもないときに行ってお付き合いをしているということは、物事が起こってお互いに交渉するときに非常によい関係になって現れてくる。日頃のお付き合いの大切さを皆さん十分、理解していないんじゃないだろうか」と言われた。カナダの訪問は、まさにそれであった。

ユーゴのチトー大統領の訃報がメキシコからカナダに行く飛行機の中で伝えられ、苦しい日程はさらに厳しく、バンクーバーから西独に飛び、ユーゴで弔問外交を展開するなど大平先生にとって生命をすり減らす外遊となった。これが、帰国間もなくの心ない内閣不信任案可決、衆参同日選挙によって、大平先生が志半ばにして倒れられる引き金となったことは間違いない。

大平先生がもう少し生きていて下さったら、日本の外交も内政も変わったものになっていたのに、という思いは今でも尽きない。しかし、大平先生は「選挙から外交まで政治にとって大切なものは人を裏切らない誠とこれを買き徹す日頃の行動であり、そこに政治家の誇りと生きがいがある」という、何ものにも代え難い教えを私に残して下さいました。この教訓は今も私の胸底に烈々と脈打っており、それあればこそ、私は長い雌伏の苦しさに耐えてこられたのだと思う。

(前参議院議員)